# 戦争のなかに生きる

## 歴史博物館企画展から

わたしたちの現在の生活は、幸いなことに平和のなかで営まれています。しかし、わずか60年程前までは、日常には戦争が存在し、そのなかで生活していました。徴兵検査にはじまり、出征、復員、戦死、様々な統制や国民徴用、物資の不足による耐乏生活というように、戦争は、多方面から生活全体を覆い、揺さぶっていたのです。そして、戦況が厳しくなるにつれて、空襲など直接戦闘に巻き込まれ、多くの生命や財産が犠牲となりました。こうしたなかで、人々は様々なことを考え、感じながらも、それぞれの日常をひたむきに生き続けたのです。

また、太平洋戦争の最中には、市域南部の東端町一帯に海軍の明治航空基地が造られました。戦争末期になると、ここから飛び立った航空機は、鹿児島県の第一国分基地や串良基地を経て、沖縄周辺の「特攻」にも出撃しました。若き搭乗員たちが命をかけた最前線は、わたしたちのすぐ身近にもあったのです。

残念ながら、世界各地ではまだ戦争があります。これらの地域では、わたしたちが今こうしている瞬間でさえ、人々は戦争のなかでの生活を強いられ続けているのです。世界に平和が訪れることを願ってやみません。

## 「戦争にいく」ということ

明治6（1873）年に発令された徴兵令と、これを昭和2（1927）年に全面改訂する形で公布された兵役法により、17歳から40歳までのすべての男子（後に45歳まで延長）には、兵役が課せられていました。実際には、満20歳になると徴兵検査を受け、その結果により兵士として徴集されていったのです。また、戦時には徴兵検査前の多数の若者が、志願して次々と入隊していきました。

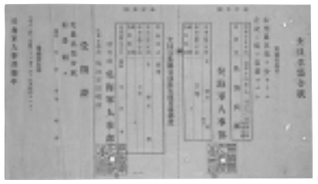
出征や入営時には、家族や地域によって盛大な壮行会が開かれました。ただ、本人たちにとっては、それが当時は当然のことだったとはいえ、出征とは、ある意味で死を覚悟することでもあったのです。出征を前に記された、まだ幼い息子へあてられた遺言書の一部には、次のように記されています。

**父は（中略）體は死しても魂は生きて居る。正しく生き正しく進むべし。**

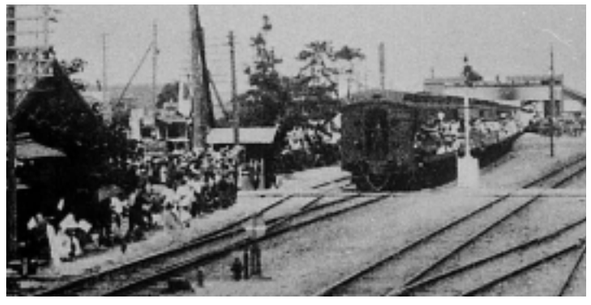
（本人は戦後に復員し、幸いにもこの遺言が発効することはありませんでした）

出征を前にして、家族に遺言書を残し、遺髪を置いていった気持ちは、今日では、はかり難い重みがあります。

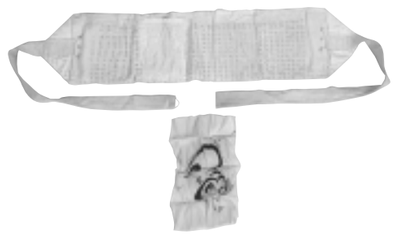
徴兵検査（昭和17年、岡崎市公会堂（現岡崎市郷土資料館））
徴兵検査では、身体測定、視力検査などの健康、運動検査が行われ、大きく５段階に分けられた。上位の甲種と乙種が現役に適するとして徴集された。



充員召集令状（昭和16年）
軍の諸部隊の要員を充足させるため、予備役の在郷軍人を召集するもの。いわゆる「赤紙」のひとつ。



軍用列車の見送り（安城駅付近）
一日に何回も軍用列車が安城駅を通過していった。



千人針（昭和前期）
戦地へ赴く肉親などのために、武運長久を祈って、さらしの布に赤糸で1000の結び目を作ったもの。人々の思いが弾丸を避けると信じられていた。

### 新美南吉のみた戦争

安城高等女学校で、昭和13（1938）年から英語の教員をしていたのが、童話作家新美南吉（本名・正八）です。彼は、常に身近に戦争が存在する生活について、次のように評しています。

**果たして平和が常態なのか。戦ひが常態であつて、平和は戦ひと戦ひのすきま、つまり変態にほかならぬものではあるまいか。戦ひが常態であるならば文学をすることも学問をすることも（実学以外は）何と無意味なことであらうか。**

（『昭和16・17年ノート』昭和17年7月3日）

こうした南吉でさえ、昭和16（1941）年12月8日の太平洋戦争開戦の心境について、

**いよいよはじまつたかと思つた。なぜか体が、がくがく慄へた。ばんざあいと大声で叫びながら駈け出したいやうな衝動も受けた。**

（『昭和16・17年ノート』昭和16年12月12日）

と記しています。戦争は、それほどまでに人の心を変えてしまうものなのかもしれません。

# 戦時下の生活
## すべてを戦争のために

昭和13（１９３８）年、国家総動員法が制定されると、すべてのヒトやモノが軍事目的優先となりました。また、前年から国民精神総動員運動が始められ、まさに身も心も、すべてを戦争のために向けた生活が営まれるようになったのです。

生活は質素を旨とし、華美なものや儀礼的なものは廃止されました。兵器の生産のため、金属が市中から姿を消していき、代わりに陶製や竹製などの代用品が用いられるようになりました。また、昭和15（１９４０）年からは、切符配給制度が始まり、米やみそ、しょうゆといった食物から衣類にいたるまで、生活必需品のすべてが切符なしには手に入らなくなったのです。

膨大な戦費をまかなうため、国債が増発され、地域ごとに割り当てを設けて強制的に購入させられたり、貯蓄が強要されたりして、戦費へと消えていきました。

愛国婦人会や大日本国防婦人会は出征兵士や戦死者の遺族を支援するなどの軍事援護活動をしました（両会は、昭和17年に合併して大日本婦人会となった）。特に兵士や家族の慰問をし、子どもたちや女子青年団、そして地域をあげて、前線へ慰問袋を送っていました。

娯楽や一般生活まで戦時色が入り込み、雑誌などのマスメディアはもちろん、子どもの遊びにいたるまで戦争一色となりました。こうした環境が、ほとんどの男の子が将来は兵士になることを夢見るという価値観を形成したのです。

梵鐘（ぼんしょう）供出（昭和19年）
里町西方寺の梵鐘が、大八車に載せられ牛に引かれて供出された。戦争が激しくなり、金属が回収された。

コンクリートの梵鐘
金属供出のために失われた梵鐘の代わりに鐘楼（しょうろう）につるされた。福釜町宝泉院にあったもの。

防空訓練（昭和19年ころ）
御幸町内会の人々が焼夷弾（しょういだん）が落ちたことを想定して、消火訓練をしている様子。

防空頭巾（ずきん）
裏面には、住所・氏名・生年月日のほかに血液型まで記されている。

各種配給切符（昭和18～19年）
家庭用食用油配給券、生菓子配給切符など。

日参団（昭和13年ころ、根崎町）
子どもたちは毎日のように戦勝祈願に出かけていた。



# 戦時下の生活
## 学徒動員と軍事教練

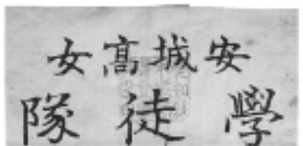
昭和12（１９３７）年に始まった日中戦争の長期化、昭和16（１９４１）年からの太平洋戦争による戦線の拡大によって、不足した兵力、労働力を補うため、大学生の学徒出陣や、中等学校生徒（旧制中学生、女学校生など）の学徒勤労動員が進められました。

実際には、昭和18（１９４３）年ころまでは、授業の合間に、出征などによって男手が不足した農家の手伝いに奉仕に出かける程度でした。しかし、戦局の劣勢が明らかとなった翌19年からは、終日、軍需工場などで働かねばならず、学生や生徒でありながら、学校で学ぶことができないという状況となりました。聞き取り調査によると、「学校に登校したのは、自らの卒業式の日だけ」とのことです。食料が不足するなかで、男女を問わず長時間労働が強いられたため、健康を害する人も少なくありませんでした。

昭和14（１９３９）年に公布された国民徴用令により、国民を軍需工場で強制的に働かせることが可能になりました。幸いにして戦地から帰還しても、徴用による過酷な労働が待っていたのです。

また、学校や勤労動員先で軍事教練が行われ、女性が、木銃や竹やりによって敵を倒すという訓練が行われました。このような軍事教練の場では、「本土決戦」や「一人一殺」などが真剣に述べられていました。しかし、こうしたことばとは裏腹に、現実を冷静にみつめていた人々は、日本の将来に対しての危ぐを抱いたといいます。

学徒勤労動員によりせんい工場で働く（昭和19年ころ）
働くのは安城女子専門学校（現愛知学泉短期大学）の生徒。後方には「持場死守」「空の決戦　誓って増産」の文字が見える。







勤労学徒隊　腕章、胸章（昭和18年）
安城高等女学校（現安城高校）の女生徒たちが勤労動員された際に、腕や胸に付けていたもの。

名古屋鍛工（たんこう）での軍事教練（昭和19年）
名古屋鍛工に勤労動員されていた安城高等女学校生徒による軍事教練。手には木銃を持って行進し、剣道の「形」のように動くという訓練だった。場所は現在の安城コロナワールドの位置。

木銃

# 明治航空基地と第二一〇海軍航空隊

戦況が傾き始めた昭和17（１９４２）年の後半になると、航空隊と搭乗員の大幅な増隊、増員が必要となってきました。そこで、外戦部隊用の常設作戦基地の候補として「明治」（碧海郡明治村。現東端町一帯）があげられ、実施へと移されたのです。

昭和18（１９４３）年３月６日から、基地用地の買収が始められました。戦時下であるため、地主の誰一人として表立って反対意見は述べず、満場一致で買収に合意したと伝えられます。建設工事は同年４月から始まり、近隣からの学徒勤労動員も行われ、文字通り突貫工事が行われました。そして、当時の行政区域名から、明治航空基地と名づけられたのです。

２つの部隊が短期間に使用した後、昭和19（１９４４）年９月15日からは、第二一〇海軍航空隊が明治航空基地で開隊し、本格使用を始めます。この航空隊は、多機種の搭乗員を１か所で効率的に養成するために編成された、実戦前の錬成教育を主務とする実用航空隊でした。配備された航空機は、零式艦上戦闘機（零戦）、局地戦闘機紫電、艦上攻撃機天山、艦上爆撃機彗星など６機種におよぶ異色の大航空隊でした。また、ここで錬成教育を受けていた搭乗員（錬成員）は、海軍兵学校73期を主体とする第42期飛行学生出身者（20・21歳くらい）、一般の大学から志願して搭乗員となった第13期飛行予備学生出身者（22・23歳くらい）、そして旧制中学校または高等小学校から飛行予科練習生（予科練）を経た第37期飛行練習生出身者（17～19歳くらい）という若い世代でした。昭和20（１９４５）年３月28日には、天一号作戦（沖縄特攻作戦）のため、こうした若き搭乗員たちが、航空機とともに鹿児島県の第一国分基地と串良基地へ飛び立っていきました。

天一号作戦に参加した、第二一〇海軍航空隊零戦搭乗員への聞き取り調査で、出撃時の心境を次のように語っていただきました。

**子どものころから死について考える教育を受けてきたので、死に対する恐怖はなかった。けれど、生に対する本能的な執着はあった。「もっと生きたい」と思った。**

また、昭和20（１９４５）年１月13日の三河地震の際には、基地の兵士により、周辺被災者の救護と災害復旧作業などが行われました。

出撃前の様子（昭和20年３月。明治航空基地）
天一号作戦（沖縄特攻作戦）へ向かう前の搭乗員たちの姿。後方の建物は北地区の飛行隊指揮所。

海軍飛行服



# 玉音放送

敗戦による戦争の終了を告げた、昭和天皇によるいわゆる「玉音放送」は、昭和20（１９４５）年８月15日正午からラジオ放送されました。

前日から、重大放送があるとの放送が行われ、当日の午前７時21分からは、「天皇陛下、御自ら御放送あそばされる」との予告が繰り返されました。

基地にいた兵士も、勤労動員により工場で働いていた学徒も、家庭にいた人々も、手を止め、ラジオの前に集まり、頭を垂れてその声に耳を傾けたのです。

ところが実際の放送では、雑音が多くよくわからなかったという場合が多いのです。これは、空襲により各地の放送局への中継線の減衰によるものとされています。また、「玉音」の後に、和田放送員による経過説明や、「終戦の詔勅」の朗読があり、人々はこれでその真意を知ったといわれています。

この放送が、歴史の転換点となったことは明らかです。しかし、長かった戦争のなかでの生活が、一変したかというとそうではありません。聞き取り調査からは、圧倒的に不安を感じたという声が聞かれました。そして何より、当時の誰もが「戦争のない平和な社会」を想像できなかったのです。

こうしたできごとから、まだ59年しか経過していないのです。

## 戦争と平和を考えるきっかけに、ぜひお越しください

ただ今、歴史博物館で開催している企画展「戦争のなかに生きる－戦時下の日常生活と明治航空基地－」では、戦争をわたしたちの日常生活の視点から取り上げています。戦争が、まさにわたしたちの生活を支配していたときの、人々の心について考える機会になれば幸いです。

●とき　９月５日㈰までの午前９時～午後５時（入館は午後４時30分まで）※毎週月曜日休館
●ところ　歴史博物館・市民ギャラリー
●観覧料　一般300円、中学生以下無料（常設展もご覧いただけます）
●問い合わせ　文化芸術課（歴史博物館内／☎〈77〉６６５５）

現在の明治航空基地跡の様子
（写真上）東端公園内にある明治航空基地の碑
（写真中）東端町八剱神社東南に壊れたまま残る爆弾庫
（写真下）東端町八剱神社東の畑に残る元油缶貯蔵庫

明治航空基地位置図
この位置図は、現在の地図上に推定再現したもの。

写真及び資料提供にご協力いただいた皆さん〈敬称略〉
学校法人安城学園、岡崎市美術博物館、岡田菊雄、小山敏夫、西方寺、受頭院、彰徳院、杉浦つや子、鈴木丹、陸上自衛隊豊川駐屯地